志賀直哉全集

第一卷

志賀直哉全集　第一卷
第一回配本（全十四卷・付別卷）

昭和四十八年五月十八日　發行
定價　二千四百圓

著者　志賀直哉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 志賀直吉　1973

目次

菜の花と小娘……一
或る朝……九
網走まで……一七
速夫の妹……三一
荒絹……六七
孤兒……七七
子供四題……八九
一次郎君……九一

二　かくれん坊……九三
三　誕　生……九六
四　輕便鐵道……一〇二
插　話……一〇九
鳥尾の病氣……一一七
無邪氣な若い法學士……一三三
ある一頁……一四三
剃　刀……一七九
彼と六つ上の女……一九三
濁つた頭……二〇一
或る一夜……二五一
親　友……二六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小品二つ……二七三
イヅク川……二七五
白銅……二七七
老人……二八一
不幸なる戀の話……二八九
襖……三〇九
祖母の爲に……三二三
母の死と新しい母……三三九
母の死と足袋の記憶……三五三
憶ひ出した事……三五九
廿代一面……三七三

〔草稿〕

花ちやん〔菜の花と小娘〕……四三五
〔花ちやん關連資料〕……四四〇
小說 網走まで……四四四
小說 速夫の妹……四五五
小說 離緣〔孤兒〕……四七八
隱坊〔子供四題〕……四八五
誕生〔子供四題〕……四八七
湯ヶ原より〔子供四題〕……四九一
一 小田原……四九一
二 輕便鐵道……四九三
小說 神經衰弱〔鳥尾の病氣〕……四九七
小說 若い銀行員〔無邪氣な若い法學士〕……五〇六
無邪氣な若い法學士……五一一
一日二ヲ晩の記〔ある一頁〕……五一六
小說 人間の行爲〔A〕〔剃刀〕……五三八

小説　人間の行爲〔B〕〔剃刀〕……五四二
小説　殺人〔剃刀〕……五四八
ラヴシーン〔彼と六つ上の女〕……五五六
お筆とお牧〔彼と六つ上の女〕……五五九
〔彼と六つ上の女〕……五六〇
二三日前に想ひついた小説の筋〔濁つた頭〕……五六一
〔濁つた頭〕……五六六
親　友……五七一
〔白　銅〕……五七四
〔母の死と新しい母〕……五七六

〔初　出〕

菜の花と小娘……五八三
彼と六つ上の女……五八七
後　記……五九三

菜の花と小娘

或る晴れた靜かな春の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾つて居ました。

やがて、夕日が新綠の薄い木の葉を透かして赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、其處で自分の背負つて來た荒い目籠に詰め始めました。

不圖、小娘は誰かに自分が呼ばれたやうな氣がしました。

「ええ？」小娘は思はずさう云つて、起つて其邊を見廻しましたが、其處には誰の姿も見えませんでした。

「私を呼ぶのは誰？」小娘はもう一度大きい聲でかう云つて見ましたが、矢張り答へる者はありませんでした。

小娘は二三度そんな氣がして、初めて氣がつくと、それは雜草の中から只一ト本、僅に首を差し出して居る小さい菜の花でした。

小娘は頭に被つて居た手拭で、顏の汗を拭きながら、

「お前、こんな所で、よく淋しくないのね」と云ひました。

「淋しいわ」と菜の花は親しげに答へました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そんなら何故來たのさ」小娘は叱りでもするやうな調子で云ひました。菜の花は、
「雲雀の胸毛に着いて來た種が此處で零れたのよ。困るわ」と悲しげに答へました。そして、どうか私をお仲間の多い籠の村へ連れて行つて下さいと頼みました。
小娘は可哀相に思ひました。小娘は菜の花の願ひを叶へてやらうと考へました。そして靜かにそれを根から拔いてやりました。そしてそれを手に持つて、山路を村の方へと下つて行きました。
路に添うて清い小さな流れが、水音をたてて流れて居ました。暫くすると、
「あなたの手は隨分ほてるのね」と菜の花は云ひました。「あつい手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ、眞直ぐにして居られなくなるわ」と云つて、うなだれた首を小娘の歩調に合せ、力なく振つて居ました。
小娘は一寸當惑しました。
然し小娘には圖らず、いい考が浮びました。小娘は身輕く路端に蹲んで、默つて菜の花の根を流れへ浸してやりました。
「まあ！」菜の花は生き返つたやうな元氣な聲を出して小娘を見上げました。すると、小娘は宣告するやうに、
「此儘流れて行くのよ」と云ひました。

菜の花は不安さうに首を振りました。そして、

「先に流れて了ふと恐いわ」と云ひました。

「心配しなくてもいいのよ」さう云ひながら、早くも小娘は流れの表面で、持つて居た菜の花を離して了ひました。菜の花は、

「恐いわ、恐いわ」と流れの水にさらはれながら、見る〳〵小娘から遠くなるのを恐ろしさうに叫びました。が、小娘は默つて兩手を後へ廻し、背で跳る目籠をおさへながら、駈けて來ます。

菜の花は安心しました。そして、さも嬉しさうに水面から小娘を見上げて、何かと話しかけるのでした。

何處からともなく氣輕な黄蝶が飛んで來ました。そして、うるさく菜の花の上をついて飛んで來ました。菜の花はそれをも大變嬉しがりました。然し黄蝶は性急で、移り氣でしたから、何時か又何處かへ飛んで行つて了ひました。

菜の花は小娘の鼻の頭にポツ〳〵と玉のやうな汗が浮び出して居るのに氣がつきました。

「今度はあなたが苦しいわ」と菜の花は心配さうに云ひました。が、小娘は却つて不愛想に、

「心配しなくてもいいのよ」と答へました。

菜の花は、叱られたのかと思つて、默つて了ひました。

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流れに波打つて居る髪の毛のやうな水草に根

をからまれて、さも苦し氣に首を振つて居ました。

「まあ、少しさうしてお休み」小娘は息をはずませながら、さう云つて傍(かたはら)の石に腰を下しました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、氣持が惡いわ」菜の花は尙しきりにイヤ〳〵をして居ました。

「それで、いいのよ」小娘は云ひました。

「いやなの。休むのはいいけど、かうして居るのは氣持が惡いの。どうか一寸あげて下さい。どうか」

と菜の花は賴みましたが、小娘は、

「いいのよ」と笑つて取り合ひません。

が、其內水の勢で菜の花の根は自然に水草から、すり拔けて行きました。そして不意に、

「流れるぅ！」と大きな聲をして菜の花は又流されて行きました。小娘も急いで立ち上ると、それを追つて駈け出しました。

少し來た所で、

「矢張りあなたが苦しいわ」と菜の花はコハ〳〵云ひました。

「何でもないのよ」と小娘も優しく答へて、さうして、菜の花に氣を揉ませまいと、わざと菜の花より二三間先を駈けて行く事にしました。

麓の村が見えて來ました。小娘は、

「もう直ぐよ」と聲を掛けました。

「さう」と、後で菜の花が答へました。

暫く話は絶えました。只流れの音に混つて、パタ〳〵、パタ〳〵、と小娘の草履で走る跫音が聽えて居ました。

チャポーンと云ふ水音が小娘の足元でしました。菜の花は死にさうな悲鳴をあげました。小娘は驚いて立ち止りました。見ると菜の花は、花も葉も色が褪めたやうになつて、

「早く〳〵」と延び上つて居ます。小娘は急いで引き上げてやりました。

「どうしたのよ」小娘はその胸に菜の花を抱くやうにして、後の流れを見廻しました。

「あなたの足元から何か飛び込んだの」と菜の花は動悸がするので、言葉を切りました。

「いぼ蛙なのよ。一度もぐつて不意に私の顔の前に浮び上つたのよ。口の尖つた意地の悪さうな、あの河童のやうな顔に、もう少しで、私は頬つぺたをぶつける所でしたわ」と云ひました。

小娘は大きな聲をして笑ひました。

「笑ひ事ぢやあ、ないわ」と菜の花はうらめしさうに云ひました。「でも、私が思はず大きな聲をしたら、今度は蛙の方で吃驚して、あわててもぐつて了ひましたわ」かう云つて菜の花も笑ひました。

間もなく村へ着きました。

小娘は早速自分の家の菜畑に一緒にそれを植ゑてやりました。

其處は山の雜草の中とは異つて土がよく肥えて居りました。菜の花はどん〳〵延びました。さうして、今は多勢の仲間と仕合せに暮す身となりました。

或

る

朝

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com